膀胱 pseudolymphoma の 1 例

佐賀医科大学泌尿器科学教室 (主任: 真崎善二郎教授)

吉永 英俊 井口 厚司 真崎善二郎

同 病理学教室 (主任: 渡邊照男教授)

徳 永 藏 渡 邊 照 男

PEUDOLYMPHOMA OF THE BLADDER: A CASE REPORT

Hidetoshi Yoshinaga, Atsushi Iguchi and Zenjiro Masaki

Division of Urology, Department of Surgery, Saga Medical School

(Director: Prof. Z. Masaki)

Osamu Tokunaga and Teruo Watanabe

Department of Pathology, Saga Medical School

(Director: Prof. T. Watanabe)

We report a 63 year-old female with solid, nonpapillary, and smooth-surfaced bladder tumescences of approximately 30 and 7 mm in diameter. Biopsy of the tumor and other apparently normal epithelium revealed dense lymphocytic infiltrations with formation of many lymph follicles. Because of the relatively large nodular form of the lesion we regarded this to be pseudolymphoma of the bladder rather than follicular cystitis. Pseudolymphoma in the bladder has not yet been reported in English literatures to our knowledge. The tumorous changes have disappeared by 6 months after the initial 3 week chemotherapy.

要旨: 63歳の女性で膀胱内に発生した径30mmと7mmの表面平滑な非乳頭状充実性腫瘤について報告した。生検の結果、腫瘤とそれとは別の部位の膀胱粘膜に、リンパ濾胞の形成をとまなうリンパ球の浸潤がみられた。腫瘤が大きかったので、濾胞性膀胱炎よりもむしろ pseudolymphoma とみなした方がよいと思われた。我々の調べた限りでは、膀胱の pseudolymphoma についての報告はなかった。3週間の抗生物質の投与のみで腫瘤は消失した。

緒 言

pseudolymphoma は胃や腸管以外に眼窩や唾液腺、乳房、肺、軟部組織などいろいろな部位での発生が報告されている。しかしながら、我々の調べた限りでは膀胱における pseudolymphoma についての報告はなかった。今回浸潤性膀胱腫瘍を思わせるような腫瘤を形成した pseudolymphoma の 1 例を経験したので報告する。

症 例

患者: 63歳, 女性。

主訴: 無症候性肉眼的血尿。

家族歴・既往歴: 特記すべきことなし。

現病歴: 昭和61年夏, 腰痛と肉眼的血尿を認めたが, すぐ止ったので放置していた。昭和62年5月16日夜, 無症候性肉眼的血尿があり, 5月17日近くの泌尿器科

医を受診し, 膀胱鏡検査で腫瘤性病変を認め, 当科で紹介された。

入院時現症: 体格栄養中等度。胸腹部に異常なく, 表在リンパ節も触知しない。

入院時検査所見: 検尿; 赤血球18/hpf, 白血球4/hpf, 尿細菌検査; P. millabilis 7×10^3 , 尿細胞診; class 1, 血算・血液生化学に異常はない。

膀胱鏡所見: 右尿管の尾側部に径3cm位と右後壁に径7mm位の表面平滑な広基性腫瘤を認める。

画像検査: IVPで右膀胱底部に鳩卵大の陰影欠損を認める (Fig. 1)。CTでも右尿管口付近に膀胱内に突出する腫瘤を認める (Fig. 2)。

以上より浸潤性膀胱腫瘍を疑い, 昭和62年6月10日経尿道的生検術を行なった。組織は腫瘤を形成していた2カ所と腫瘤以外の部位から三角部を含めて4カ所

Fig. 1 Intravenous urography shows a filling defect of a pigeon egg size in the right bladder base.

Fig. 2 CT findings reveals 31×40 and 9×18mm filling defects at the posterior wall of the bladder.

採取した。

病理組織所見：膀胱粘膜の増殖はなく粘膜下および粘膜固有層に germ center をもつリンパ濾胞とその周囲にリンパ球の浸潤を認めた (Fig. 3)。いずれの組織

Fig. 3 Microscopically, TU-biopsy's specimens consist of prominent lymphoid follicles with germinal centers in the lamina propria of the bladder.

Fig. 4 Intravenous urography done 6 months after TU-biopsy shows no filling defect at the bladder.

片も同様の所見であった。当初、その組織像より濾胞性膀胱炎と診断された。しかし、大きな腫瘤形成がみられており、通常の濾胞性膀胱炎とは異なっていたため、最終的な病理診断は pseudolymphoma とされた。

生検後は3週間抗生物質を投与しただけで経過をみていたが、2カ月目には腫瘤は著明に縮小し、5カ月

目には消失した (Fig. 4).

考 察

病理組織検査において膀胱の粘膜下に germinal center をもつリンパ濾胞が集簇している場合、一般に濾胞性膀胱炎とよばれる¹⁾²⁾。臨床的に濾胞性膀胱炎といえればしばしば遭遇する疾患であり、内視鏡的に黄白色の1~3mm程度の丘疹様の病変が三角部を中心に散在する³⁾ことが多く、特に診断や治療面で問題とすることはないのであるが通例と思われる。

本症例においても生検の結果、粘膜下にリンパ濾胞の集簇がみられた。また、腫瘤とは別に離れた部位にもリンパ濾胞が存在したことから、当初、病理診断は濾胞性膀胱炎とされた。しかし、X線検査や内視鏡検査でその大きさが直径3cmくらいもあり、上記のような通常経験する濾胞性膀胱炎とは異なったものと思われた。

胃や腸管などの膀胱以外の器官においては、本症例のように比較的大きな nodule を形成し、組織学的に germinal center をもつリンパ濾胞の集簇した病態の存在が認められており、pseudolymphoma の nodular type³⁾あるいは、nodular lymphoid hyperplasia⁴⁾といった呼称で呼ばれている。しかし、この pseudolymphoma も lymphoma の前駆状態ではないかという主張は一部にはあるものの⁴⁾⁵⁾、これが独立した疾患としてとらえてよいものかなど、その病態の位置づけが必ずしも明らかではないように思われる。

本症例もリンパ濾胞の集簇がみられた点、濾胞性膀胱炎としてよいのかもしれないが、冒頭に述べたように泌尿器科医にとって濾胞性膀胱炎といえば、膀胱鏡検査でみられる三角部領域を中心とした1~3mmの丘疹状変化と考えやすい。ところが、本症例のように大きな腫瘤を形成しているような場合には、胃あるいは他の器官で呼ばれるように pseudolymphoma の nod-

ular type あるいは nodular lymphoid hyperplasia といった呼びかたがより正確に病態を表現しているように思われる。

pseudolymphoma は一般に予後は良好とされているが、これが自然に寛解するか否かは未だ明らかにされていない。本症例では生検後6カ月目には腫瘤は消失したが、それがどういった機序で起こり、また消褪したのか全く不明としかいいようがなく、本症の呼称、原因、臨床像や経過など今後の検討が待たれる。

結 語

1. 63歳女性の膀胱に発生した pseudolymphoma と考えられる1例について報告した。

2. 3週間の抗生物質投与のみで6カ月目に腫瘤は消失した。

3. pseudolymphoma の報告は多数みられているが、膀胱発生例は我々が調べた範囲では報告が無いように思われる。

文 献

- 1) Schlomovitz, B.H.: Cystitis follicularis. J. Urol., 47, 168—170, 1942.
- 2) Hinmman, F. and Cordonnier, J.: Cystitis follicularis. J. Urol., 34, 302—308, 1935.
- 3) Tokunaga, O., Watanabe, T. and Morimatsu, M.: Pseudolymphoma of stomach. A clinicopathologic study of 15 cases. Cancer., 59, 1320—1327, 1987.
- 4) Wolf, J.A. and Spjut, H.J.: Focal lymphoid hyperplasia of the stomach preceding gastric lymphoma: Case report and review of the literature. Cancer, 48, 2518—2523, 1981.
- 5) Brooks, J.J. and Enterline, H.T.: Gastric pseudolymphoma. Its three subtype and relation to lymphoma. Cancer, 51, 476—486, 1983.

(1989年1月10日受理)